7 “罪を犯した人”の背景をひもとく！

～その背景から、わたしたちの地域や暮らしを考えてみよう～

○開催目的

その人の背景や抱えていたものを知り、理解することは、再犯をなくしお互いに助け合える地域づくりにつながるのではないでしょうか。

この分科会では、「触法」・「累犯」を切り口としながら、制度について確認し、また罪を犯すに至った背景を知り、それぞれが自分の身近なこととしてとらえ、安心して暮らせる地域・つながりづくりについて考えます。

○開催日時

２月 13 日（土）10：40 ～ 13：10

○参加者数・出演者・団体

参加者数：31 名（参加者 24 名、出演者３名、スタッフ４名）

出演者・団体：赤平　守 さん（特定非営利活動法人 日本障害者協会（JD）理事・企画委員会副委員長、新宿区保護司）

安西　清 さん（日野・多摩・稲城地区保護司会 会長）

河村　斉 さん（株式会社リバイバル 代表取締役）

○プログラム内容・成果と課題

１　登壇者活動紹介

・各団体の活動概要を紹介していただきました。

２　登壇者パネルトーク

・地域生活定着支援センターを創設した背景と現状とこれから
・保護司とはどういう役割があるのか
・協力雇用主の役割
・罪を犯した人の背景や事例について
・罪を犯した人を地域で支えるには

３　参加者とのグループトーク

・登壇者の話を聞いて感じたこと
・罪を犯した人の背景を知り、私たちは何ができるか？

についてグループトークを行い参加者で共有しました。

４　課題

・刑務所に入っている人たちの中には障害のある人も多くいて、社会に復帰した後もとても困難な状況にある。
・犯罪自体は、年々減っていることをデータから知ることができるが、高齢者の犯罪は増えており、それに伴い刑務所も高齢化している。
・知的障害者（ＩＱ70 未満）の人も刑務所には 30％ほどいて、出所後も生活するのが困難で、再犯をくりかえし何度も刑務所に入ってしまうことが多くある。
・障害や貧困などが必ずしも犯罪の連鎖につながるわけではなく、その状況に対する絶望感や孤独感、生きにくさが犯罪または再犯につながってしまう。
・更生保護に関心を持ってもらえるような機会が少ないため、実状を知ってもらうことが必要である。
・虐待や貧困、親が障害を持っていることなどが背景にあり、少年院や刑務所がシェルター的な役割を持っているという事情もある。
・金銭面の貧困でなく、社会との関わりや、家庭環境の貧困状況が課題である。

５　成果（話されたこと）

・罪を犯した人自身も孤立しているが、支援する側も孤立してしまう場合もあり、いろんな組織や人とのネットワークが必要。
・生きにくさ（社会の波にのまれた）を抱えた人がいることを正しく知ってもらう必要がある。
・なぜ罪を犯すような状況になってしまったかに気づき、気づいた人が積極的に関わらないと救われない人が出てきてしまう。
・やり場がなくなり罪を犯してしまった若者が、社会復帰する際に受け入れられる立場になりたい。
・助けてほしいと手を差し伸べている人に対して、その手を握り返せることが必要。
・今の生活を手放したくないと思える安心した環境を、一緒に考え作ることが大切。

○参加者の声

・今回の分科会を通し、人と人のつながり、社会全体で見守っていくことがとても重要であると再度考えさせられました。いろんな人に発信していくことも大切。
・このようなテーマの講演会やフォーラムが大変少ない中、本日は多くのことを学ばせて頂き、「関心」というスタート地点を頂きました。
・実際の当事者のお話を聞き、手を差し伸べる事が（どのような反応でも）更生のきっかけの１つになれると分かりました。
・去年、精神的に大変追い詰められたこともあり、罪を犯す瀬戸際までいった事もありました。抑止力となりえるということと、罪ということの理解を深められま

した。

・きちんと正しく、理解することの大切さ、一緒に見て、一緒に気付いていく、という言葉が響きました。

○担当者・記録

《担当》	宮崎	雅也（社会福祉法人 日野市社会福祉協議会）
	新部	聖子（スープの会）
《運営サポート》	川上	侑希子（東京大学大学院 教育学研究科）
	柴田	健次（社会福祉法人 東京都社会福祉協議会）
《記録》	宮崎	雅也（社会福祉法人 日野市社会福祉協議会）